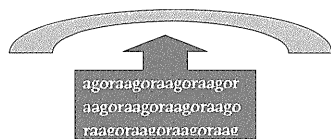


交流のひろば/agora—crosstalking—



合掌造り民家の「結」^{ユイ}による維持管理

—世界遺産白川村荻町地区での屋根の葺替え—

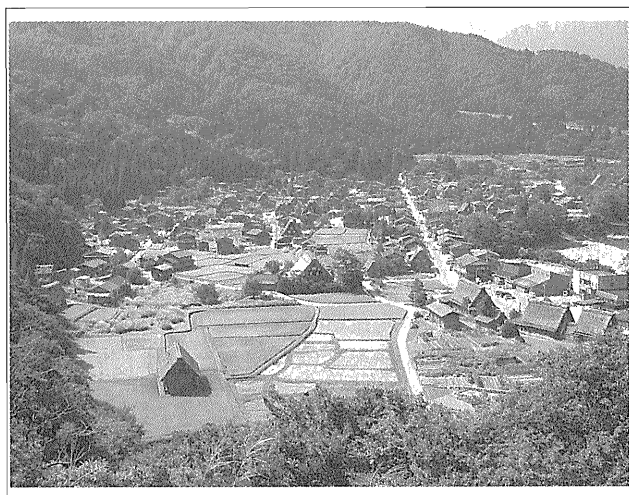
松本 継太

最近、全国各地において伝統的な町並みを生かした街づくりや世界遺産登録誘致などの文化財を生かした様々な動きが活発になっている。飛騨の中でも秘境と呼ばれた岐阜県白川村荻町地区は平成7年に世界遺産登録を受けたことでその名が世界に知れわたり、現在では年間150万人に上る観光客が訪れる村となった。しかし、その裏には荻町の人々が30年間続けてきた合掌造り民家の保存活動や地区に住む人々の日頃の維持管理があり、今もなお、その活動は続けられ次の世代に引継がれようとしている。ここでは白川村における合掌造りの屋根の葺替え作業という具体例を紹介して、村社会の中での人々の繋がりをご紹介したい。

キーワード：岐阜県白川村荻町、合掌造り民家、村社会、茅葺き屋根、互助労働、屋根葺き、世界遺産

1. はじめに

白川村は岐阜県の北西部に位置する人口1,900人ほどの山村である。白川村というと「合掌造り」と呼ばれる切妻造り茅葺きの民家で有名であるが、世界遺産に登録されている荻町地区（写真—1）には今でも59棟の合掌造り民家が存在している。



写真—1 世界遺産に登録されている荻町地区

この「合掌造り」は隣村の高山市荘川町（旧荘川村）を源流とし富山湾に注ぐ「庄川」流域の白川郷と富山県五箇山地方に見られる切妻造り茅葺きの民家の総称である。ほんの50年ほど前には白川郷・五箇山地方の住居は大方この「合掌造り」であり、そうでない建物の方が珍しかった。村の人の中には「子供の頃テレビが村に入ってくるまでは日本の家は全て合掌造りだ

と思っていた」と言うほど当時の白川村はまさに合掌造りの村であった。

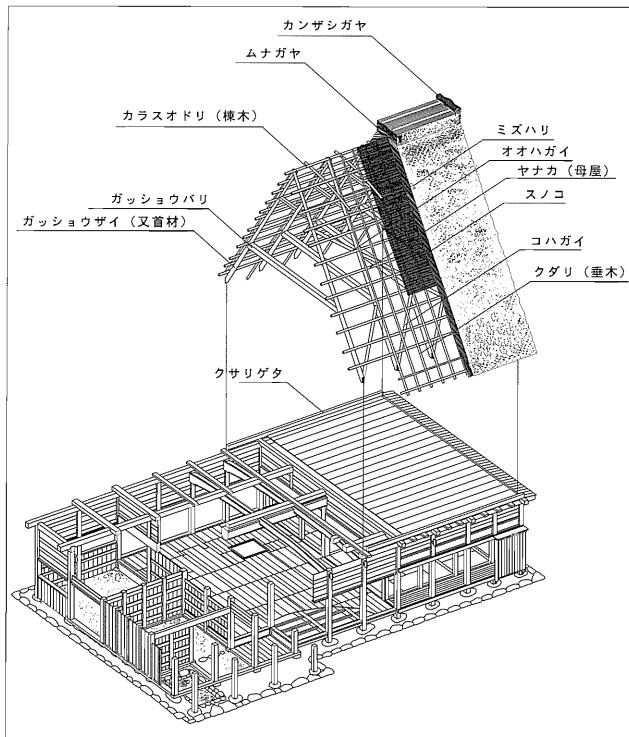
しかし、昭和27年から始まる電源開発のダム建設による集落規模の消滅や、昭和30年～40年にかけての大手企業による山林買収、土地投資による集落ぐみの買収に伴う集団離村など昭和20年～40年後半にかけて合掌造りは激減した。消滅する地区の合掌造りは買い手が見つかれば村外に売られて移築されたが、売り手の見つからない合掌造り民家は壊された。村の記録では大正13年に300棟あった合掌造り民家が昭和46年には132棟となっており、この50年の間に激減した。

合掌造り民家が次々に解体されたり燃やされたりといった光景を目の当たりにした白川村の人々の「このままでは自分たちの村が無くなってしまおう」という危機感や昭和46年の「荻町集落の自然環境を守る会」の発足に繋がり、この住民による保存運動を中心に合掌造り民家は守られていくこととなる。同時にこの頃に合掌造り民家の文化財としての認識が深まった。以後、荻町地区は昭和51年の重要伝統的建造物群保存地区選定を受けて行政による保存体制も整い、平成7年の世界遺産登録を迎え、今も住民の方々の努力により合掌造り集落の風景は守られている。

本報文ではこういった戦後の高度経済成長の波に翻弄され、また現在は世界遺産登録という冠を持った合掌造り民家が実際どのように維持管理され、次世代の子供たちへ受継がれていくのか、合掌造り民家の屋根の葺替えを事例にご報告したい。

2. 合掌造り民家とは

合掌造りの構造及び小屋組みの部材名を図—1に示す。



図—1 合掌造り民家構造図と小屋組み部材名称

合掌造り民家とは一般的には次のように定義されている。

「小屋内を積極的に利用するために、又首構造の切妻造り屋根とした茅葺きの家屋」。

定義の中の「小屋内の積極的な利用」というのは、養蚕のことで白川村では幕末から明治にかけて養蚕業が盛行した。村域の95%は森林という白川村では庄川の河岸段丘に集落が形成され、耕作地はそのわずかな平地に開かれた。そのような地形条件から平地でなくても可能な「養蚕」は当時の貴重な現金収入を得る一大産業だった。特に絹機業の先進地である越中城端との交易が養蚕業拡大に拍車をかけ、白川村の生糸は文久元年（1861年）の品質等級において堅糸として最高位に位置づけられ「飛驒白川糸」として有名であった。

このような社会背景の中、人々は養蚕を行うお蚕さんの飼育場を小屋内（屋根裏）に求めた。そして小屋組み構造を切妻にすることで外部からの採光と通風を確保し、蚕の飼育環境を向上させた。その結果、外部に三角形の壁面が出現し特異でダイナミックな外観となったのである。事実、全国的に見て養蚕が盛んな地

方の民家の小屋組み形態はバリエーション豊かで民家の持つ外観の地方性を最もよく現している。

また、合掌造りは又首材を用いることによって小屋内に開けた空間を作り出している。又首材というのは合掌造りの外部からも見える三角形を構成する二等辺の斜め材のことで「合掌材」とも呼び、この材料が両手を合わせる「合掌」を連想させることから「合掌造り」の名称の由来とされる材料である。

この又首材を太くして三角形に組み、棟木や母屋を支えることで棟束や母屋束とそれらを繋ぐ小屋貫を省略することができ、小屋内を広く使うことができるのである。この又首材による小屋組み構造を「又首構造」と言い、茅葺の民家では広く使われている。しかし他の地方では又首構造によって作り出された空間を物置程度にしか使用していないのに対し、白川・五箇山地方ではこの空間を養蚕の飼育場に利用し、大きい家では小屋内を何層にも分けて積極的に飼育空間を確保しているところが特徴的である。

さらに、合掌造り民家には非常に大規模なものが多い。大きいもので桁行が10間以上のものもあり全国的に見ても大規模なものが多い。大規模である理由については白川村の一部の地区に見られる「大家族」といった社会構造や焰硝産業など様々な要因がからんでいると考えられるがここでは割愛させていただく。

このように合掌造り民家は「養蚕」が深く関わって作り出され、その産業を促進させるために構造の各所に改良が加えられ、また、大規模であるという点で日本の茅葺き民家の中でも進んだ技術が取り入れられている民家であると言える。

3. 合掌造り民家を支える「結」

以上、合掌造り民家の概要を述べたが実際にこのような大規模な家を村の人々はどのように維持管理してきたのであろうか。

合掌造り民家を建てる場合、白川村では他の地区から大工を呼び寄せて建築した。大工は主に能登の大窪系の大工と高山系の大工の2系統が関わっていると考えられている。大工が関わる部分は軸組み部分のみで、小屋組み及び屋根葺きは村民が行う。

大規模な合掌造り民家を維持するのに一番労力を要するのが屋根の葺替えである。合掌造り民家の屋根は茅で葺かれており、概ね30年から50年の間隔で葺替えを行わなければならない。この屋根の葺替えは「結」と呼ばれる互助労働によって行われてきた。「結」というのは与えられた労働力を等量の労働で返すとする

労働交換のことである。「結」は「組」組織を一つの単位として組織的に行われてきた。

「組」というのは最小単位の「イエ」の上位にくる単位で、簡単に言うにご近所どうしということであるが村ではまずどんな共同作業においてもこの「組」を一つの単位として組織的に仕事を行ってきた。山間部でしかも豪雪地であるという厳しい自然条件の中、お互いの生活を守るため人々はこの組単位をうまく使うことで共同作業を円滑に行ってきた。

この組単位の共同作業のことを白川村では「ニンソク」と呼び、すべてが無報酬で行われる。具体的には「用水サライ」や「道カキ」「雪フミ」「雪オロシ」等の作業があり、個人的な理由で参加できない場合は出不足金等を支払って免除してもらうということもある。要するに同じ土地に住むものの義務としてこの「ニンソク」が位置づけられており、行う場所、時間等は全て伍長（組長）から「組」単位で伝達される。

以上のような「組」という組織的な枠組みは「ニンソク」だけでなく、各家の生活に関わる仕事にも活用された。婚礼や葬儀がその最たる例であるがそういった短期的に多くの労力を要する状況において組組織で動くという慣習は屋根葺きだけでなく様々な状況で働いているのである。

その中であって「結」も他の労働と同じく村に住むものの義務として村人は積極的に参加する。「結」を依頼した家では参加した全員の名前を「結帳」と呼ばれる綴りに書き記す。「結帳」に記してある人から声がかかれば必ずその家の屋根葺きには行かなければならないため、労働力の貸し借りを常に把握できるようにしているのである。

4. 「結」による屋根の葺替え

屋根の葺替えは今と昔ではやり方が違う。ここでは「結」による屋根葺きの今と昔を交えてご紹介する。

(1) 材料の確保

屋根の葺替えは材料を集めることから始まる。茅は秋の11月上旬のススキが茶色に乾燥した頃を見計らって刈取られる。現在はススキを使用しているが昔はカリヤスというススキよりも丈が短く細い材料が主に使われていたようである。白川村ではススキを「大茅」、カリヤスを「小茅」と呼んでいる。

茅は個人の茅場から刈取り蓄えられる。茅場は近隣の山の傾斜地にあり、秋に刈取った茅はソリ状に茅を結束し、これを「ムカデ」と呼び、急斜面を滑らせて

平地に運搬する。平地に運搬した茅は円錐状の状態に茅を積み、これを「ニュー」と呼び、保管をした。どの家も毎年秋になると同様に茅刈をして屋根の葺替えに備えていた。

しかし、屋根を葺替えるには自分のところの蓄えだけでは葺くことが出来ないため、茅の貸し借りである「茅頼母子講」によって工面した。このように「結」による屋根葺きは労力の貸し借りだけでなく、材料についても同様に貸し借りを行っていた。

冬に入ると外仕事が出来なくなるため、屋根下地や茅の結束のための藁縄を縛うことを冬のうちにやった。こうして春先の屋根葺きに備えて必要な資材を秋口から冬にかけて工面しておくのである。

(2) 屋根葺き当日

材料の準備も整い、いよいよ屋根の葺替えを迎えるわけであるが屋根葺きをする家では屋根葺きに出てもらう各家に「結」のお願いに回る。「結」を頼む範囲はその家の屋根の大きさによるが荻町では大半の家が自分の所属する組と両隣の組の3組の範囲内で行っていた。

屋根葺きは大体春先の3月～4月という農繁期の前に行う。まず、屋根の葺替えの前に古茅を撤去する屋根剥き作業から始まる。その日の朝早くまだ暗いうちから始め、屋根剥きを終えた後、母屋の縄の締めなおしや垂木のネソのかけなおしを行い小屋組みを整える。ネソというのは垂木と母屋を結束する材料のことでマンサクの生木を練って結束部分をかけやで叩いて使う。今で言う番線のような役割で使われる材料で、生木が乾燥すると収縮してよく締まるので重宝がられた。そうして屋根下地を整えた後、簾を敷き軒先から順に平葺きを行っていく。それと同時に両妻の部分の屋根葺きは平葺きとは違った特殊な技術を要するため熟練した人が担当し平葺きに先行して行われていく。妻部を「カタキリ」と呼ぶためそこに配置された人を「カタキリの人」と呼び、今でもここは熟練した人が担当している。

合掌造りでは茅を押さえる押し鋒にマンサクや桜の木といった粘り気の強い雑木を使用し、これを「ヌイボク」と呼んでいる。葺き厚の厚さ分に茅を置いた後、このヌイボクを置いてヌイボクと垂木とを縄で結束して茅を押さえるのである。縄を垂木に渡す際に小屋内と外部で縄のやり取りが必要となるので、小屋内には「ハリサシ」と呼ばれる背丈ぐらいの木の針（ヌイバリ）を持った人たちが一列に並び外部との縄のやり取りを担当する。ヌイバリを屋根に差して外部に針先を



写真一2 「結」による屋根葺きの様子

出して針先の穴に縄を通してもらい、合図と同時に引抜いて垂木に渡す。その後もう一度外部に向かって差込み、外の人に縄を取ってもらうという手順で縄を垂木に渡す。そうして渡された縄を今度は結束するのであるが、その時に茅があとで落ちないようにヌイボクをカケヤで叩いて縄を引張り、茅を勢い良く絞めていく。このカケヤは「ホイホイ」と掛け声をかけて全員で一斉に振るため、非常に迫力があり屋根葺きの醍醐味でもある。平葺きはこれら一連の作業を繰返し棟に向かって葺きあげていく。

写真一2に見るように屋根葺きが多い時で100人～200人程の人々が関わる。茅を運ぶ人、屋根の上で茅をあげる人、平葺きをする人、カタキリをやる人、ハリサシをやる人、カケヤを振る人等、それぞれの持ち場をそれぞれの経験で担当してその役割をこなす。そして、屋根の上に上がり下から全体の均衡を見て茅の量や葺く速さを指示する人がこの大人数を采配するのである。とにかくビニールシートが普及する前の時代の屋根の葺替えは一日で作業を終わらせる必要があったため、今では考えられないほどの手際の良さが必要であったという。

(3) 屋根葺きを支える女の人の力

屋根葺きの作業自体は男の仕事であったが実際にはその作業を支える女の人達の力も重要な役割を持っている。「結」による屋根葺きが多い場合で「マエビル」「ヒル」「コビル」「ナオライ」と1日の内に4回の賄

いを必要としその準備や接待は女の人達が担当する。その全てを行うには親戚総出は当然のこと、同じ組の女性に頼んできてもらったりと、やはり女手にも男手同様労力の貸し借りが発生するのである。「結」で屋根葺きを行う場合、手伝いに来ていただいた人達に気持ちよく帰って貰わねばならないという気持ちを抱える分、最も気苦労するのはその家の女の人達かもしれない。

(4) 現代の「結」

現代における「結」は少しずつ変化してきている。変化の原因は合掌造り民家の減少である。合掌造り民家を持つ人と持たない人がいる中で同等の労働力の賃貸関係は成り立たない。実際に合掌造り民家を持たない人は「結」に参加したいと思っている人が多いが、「結」を依頼する施主側にとってみれば相応の労力を返すことができないためなかなか頼みづらいのである。

そんな状況の中で白川村では昭和38年に「合掌家屋保存組合」(以下、合掌組合)が結成され、以後この組合を中心に屋根の葺替えが行われてきた。この合掌組合は「茅一ノ講」と呼ばれる合掌造り民家を持っている人々から毎年茅を一ノずつ募ってその年の葺替え用の茅を確保するという活動が発端となり結成された。よって組合員は合掌造り民家の所有者全戸ということになり、現代の「結」は合掌組合を中心に行われている。

現代の「結」のやり方にはいろいろなパターンがあ

る。体外のケースが基本的に地元の建設業者が屋根の葺替えを請負った中で行われる。よって屋根の葺替えの材料確保や仮設作業などの下準備はほとんど請負業者が行い、屋根剥きから屋根葺きを合掌組合員が行う。その家の事情によってやり方は少しずつ違いはあるが、現在「結」でやるという場合は以上のケースが多い。

屋根剥きから小屋組みの縄やネソのかけなおしなどは親戚や所属組が参加して行い、屋根葺きからは合掌組合員に声がかかるといった形で「結」の範囲が決められ、中には合掌組合員ではないけれども個人的な付き合いで参加する人もいる。

昔は1日で屋根剥きから屋根の葺替えまで全てを行っていたが、シート養生が可能な現代では屋根の葺替えの前の週に屋根剥きの日を設定して行う。また、屋根葺きは今でも1日で行うというケースが主流であるが1週間ほどの期間をかけて行い「この日は何組に参加してもらおう」というような輪番制をとるケースもみられる。これは観光業で生計を立てる人々が多くなり、休日に人手を集中させることが難しくなってきた中で「結」をどうにか存続させたいとする工夫の一つであると言える。

荻町ではこういった工夫を続けて「結」を何とか後世に残そうと努力が続けられている。最近では屋根の葺替えの全てを業者委託にするケースも増えてきており地元の人々は「結」の継続に不安を感じている。しかし、地元の特に若い世代の人たちは何とか1年に1棟だけでも「結」による屋根葺きをやりたいと願っており、その年の葺替えの家に「結」でやってもらうよう働きかけを行うなど「結」の大切さをなんとか子供たちに伝えたいと日々頑張っている。

荻町にとって「結」を続けることによる効果は以下のように何事にも代えがたい。

- ①屋根葺きを通して伝統技術が継承される。
- ②合掌造りの尊さを全員で再認識できる。
- ③子供たちが参加することで地域教育の場となる。
- ④皆さんに貰っていただいた屋根という責任が芽生える。

ほかにもいろいろ良いところがあるが、私が好きなのは屋根の葺替えの後の「ナオライ」で、屋根の完成を祝って全員で酒盛りをするのだが、この時間が最も

地域の結束が高まる時であると実感している。こういった風景がいつまでも続くよう地域力を高めることは今の世の中にとってとても大切な事だと思う。

5. おわりに

「結」は日本の社会情勢の変動を顕著に受ける形で変貌し続けている。「結」を村という枠組みの中の一つの社会構造と捉えれば、日本の社会情勢の波によって変化し続けることは当然のことと言える。かつて白川村に限らず全国どこの山村でも「結」のような社会構造があったはずである。それが、だんだんと希薄になっているという背景には日本の合理化主義による都市化やそれに付随した山村の過疎化が考えられる。特に昨今の町村合併という大きな波は山村社会に多大な衝撃をもたらした。

最近巷では親が子供に手をかけたり、子供が親に襲い掛かるといった常軌を逸した事件が続出している。これら数々の事件の根底には社会からの孤立感が大きく影響していると思う。それは、今の30~40代の世代が生まれた頃にはすでに存在していたのかもしれない、その時代は合掌造り民家が激減した時代である。

村社会がしっかりと維持できるような世の中であるということは、人々がいろいろな場所で責任を持たされて生活をしているということであり、責任を持たされているということは言い換えれば村社会の一員に認められているということである。こういう時代だからこそ、もう一度村社会の構造を日本人一人一人が見つめなおし、人間同士の繋がりを再構築していく必要があるのではないだろうか。

その中で今や世界遺産となった白川村は「結」による屋根葺きを続けていくことで平和な社会を体現していける村であると信じている。 JICMA



【筆者紹介】

松本 継太 (まつもと けいた)
財団法人世界遺産白川郷合掌造り保存財団
文化財専門設計監理技師